

「相互扶助」継承へ

1面から続く

「人と人のつながりの大切さを痛感した」。国際医療ボランティアAMDA（本部・岡山市北区伊福町）が環太平洋大（同市東区瀬戸町観音寺）の学生と協力して実現した能登半島地震の被災地支援活動。参加した体育学部4年友成翼さん(22)は話す。元日の地震発生から半年以上が過ぎたが「まだまだ支援が必要だと実感した。好きなサッカーで子どもらに笑顔を届けることができた」。

8月5日から3日間、同大サッカー部有志19人は石川県輪島市の輪島中を訪れ、市内の6小学校が間借りしていた同中の教室を清掃し、サッカー部員の生徒14人と練習にも汗を流した。

AMDAが地域と国際社会に貢献できる人材を育成しようと企画したプログラムの一環。同大を含む県内外12の大学・専門学校と包括連携協定を結んでおり、学生たちに、相手を尊敬し、苦労を共にする人間関係を築いて信頼が生まれる「相互扶助」を体感してもらおうことが狙いだ。

一枚の写真

AMDAは1984年8月1日、当時開業医だった菅波

学生も参加、現場を体感



輪島中サッカー部の生徒と練習で交流を深める環太平洋大サッカー部の学生ら＝8月6日、石川県輪島市河井町（AMDA提供）

茂・AMDAグループ代表「(77)が設立した「アジア医師連絡協議会」が始まり。「The Association of Medical Doctors of Asia」の頭文字を取り、NPO法人化(2001年)を機に正式名称となった。

菅波代表が高校2年の夏に見た太平洋戦争の写真にある。南方戦線の浅瀬に半分顔を埋めて亡くなっていた同世代の日本兵を捉えた一枚。なぜ若者が遠い異国で死ぬ物の見方や考え方が違う人は、ネパール支部と共に各

国からの120人を超える医療メンバを派遣。18年7月の西日本豪雨では総社市の避難所で救護所を設け、倉敷市真備町地区で仮設診療や避難所での鍼灸・マッサージ施術にも貢献した。能登半島地震でも発災直後から緊急医療チーム延べ52人を輪島中に派遣し、約1カ月間、治療や感染対策、衛生環境の整備に取り組んだ。

「いち早く駆け付けて現場のニーズを把握し全力を尽くすのがAMDAのスタイル」と佐藤拓史理事長(59)は話す。

輪を広げて

そのAMDAが力を注ぐのは「相互扶助」の精神を引き継ぐことだ。将来を担う若者に国際支援活動の必要性を説き一端に触れてもらおうと、1995年には「AMDA中学高校生会」が誕生。岡山県内で災害支援熱が高まった阪神大震災の直後だった。現在は33人が所属しており、AMDAの歴史や活動を知る勉強会のほか、南海トラフ巨大地震で大津波が想定される高知県黒潮町の高校生と交流を続け、相互扶助の大切さを伝えている。

災害や戦争が多発する混乱の時代。菅波代表は「相互扶助の精神を継承し、平和を実現させたい。今後は、若い世代だけでなく企業の参加も促し人道支援の輪を広げたい」と訴える。(山内悠記子)

さんデジに関連話題